



殉はその時に見た男の特徴を、一つ一つ挙げていった。

切れ長の、意思の強そうな目
V字に釣り上がった唇
風になびく痩せた長身
黒ずくめの衣服
握られた刀

「似ていたんです、兄さんに」
「でもよ、確かお前の目は生まれつき…」
「兄さんの目で、兄さん自身を見た事があるんです。随分と昔ですが」
「そんな事も出来るのか」

驚いた声で銀さんが聞いた。

「めったにありませんし、やろうと思っても出来ませんよ」
「フム。そんなものかね。俺にはよく判らねえな」

溜め息と一緒に煙を吐き出す。

「カナちゃんは辛いと言ってた、辛いから近寄るなど。彼女にあの夜の記憶はないと聞きました。きっと心のどこかで、あの男…兄さんに似たアイツと僕に何か関係があると判っているんです。だから」
「お前を避ける、と？」

殉が頷く。

「お嬢、泣いてたそうだな」
「え？」
「俺には聞こえなかったが、泣いてたらしい。ある子が教えてくれたよ。もしかすると、お嬢はずっと心の中で泣き続けていたのかも知れねえな」
「銀さん、それって…」
「その後笑ったのさ、屈託無く。俺は初めて見たよ、お嬢の笑顔を。それで決まったんだ、九十九先生がお前とお嬢を…」
「それって、みーちゃんの事じゃないですか？！」

杖を放り出した殉が屈み込んで銀さんの肩をガッシと掴んだ。

「イテッ！ おい、何だいきなり？！」
「みーちゃんが、碧ちゃんが銀さんにそう言ったんじゃないですか？！」
「そうだ、そうだよ！ お前あの子を知ってんのか？」
「あの子は普通じゃない、あの子は僕と同じなんです！ 仲間なんですよ！ 心の声が聞こえる仲間なんです！！」
「判った、わかったから手を離せって」

興奮した殉の手を肩から引き剥がすと、その手を握り締めたまま銀さんが言った。

「俺ももしやと思ったが、やっぱりそうなんだな。いいか坊や、この事は誰にも言うんじゃねえぞ。九十九先生はな、お前とお嬢を使って実験をしてるんだ」

「実験？ 実験って…」

殉の顔に戸惑いが浮かんだ。

「サイコイン能力者を使った実験的治療。俺もエミちゃんも、そのチームの一員という訳さ」

これが話したかった事なのかと殉は思った。

◇

「おはよう、殉くん」

白く長い病院の廊下で恵美子が声をかけてきた。

殉の背中が一瞬、ピクリと反応する。

「おはようございます、衣笠さん」

ゆっくりと振り返る殉の顔は、いつもと変わらぬ微笑を浮かべていた。

「ちょっと、いいかな？」

「ええ、何ですか」

きた…

銀さんの言った通りだ

恵美子の言葉に備え、殉は心の中で身構えた。

「今度の月曜日なんだけど、リハビリの後、彼女…清水加夏子さんに会ってくれないかな」

「カナちゃんに？ でも今彼女は…」

「そう、手のつけられない暴力癖で誰からも敬遠されてる。貴方自身も被害者の一人よね」

「被害者だなんて… あの時は九十九先生に助けてもらいましたが」

「彼女に変化が現れたの。ついこの間の話よ。笑ったの、あの娘が」

「笑ったんですか？ カナちゃんが」

「そうなの、笑ったのよ。それでね…」

恵美子が少しの間、言い淀むような仕草を見せた。

「今なら、貴方と加夏子ちゃんを会わせる事が出来るわ。今までは貴方の身を案じて、彼女を貴方に近付けないようにしてきたけど、今ならきっと」

「気のせいかな。僕から会いに行くのも出来なかったような気がするのですが。検査だとか何だとか、その都度色々な事があって」

「それは…知らない。偶然じゃない？ 私達は加夏子ちゃんの方だけを見てたから」

「わたし、たち？」

恵美子の顔がスーッと白くなる。

「それはともかく。月曜日はマズいな、僕、また一時帰宅しようと思うんです」

「そ、そう。じゃあ月曜日は無理よね。いつなら大丈夫？」

「その一週間後なら、たぶん」

「なら、その頃をお願いします。頼むわね。加夏子ちゃんの回復は、恐らくあなたにかかっていると思う」

「判りました、衣笠さん」

歩き去る恵美子の足音を見送りながら、殉は銀さんの言葉を思い出していた。

お嬢と会うなら、誰にも知られず、誰も居ない所がいい

病院は駄目だ。恐らく途中で邪魔が入る

それはお前達の為にならねえ事だ

坊やもそんな事は望むまい

それから…

みーちゃんの事、あの二人に勘づかれるな

一人きりの廊下で、殉はゆっくりと頷いた。

◇

父親としては当然の困惑であった。

原因不明のまま死にかかった一人娘が昏睡状態から目覚め、同時に失語症からも回復したと喜んだのもつかの間、相対した彼女は何処か薄ら寒い目をして自分を睨みつける、彼の知らない別人のような存在になってしまっていた。

それでも暫くの間はよかった。

違和感を残しながらも、少なくとも外見上は従順な反応しかみせなかったから。

そのうちに始まった。

何の予兆もなく、見境いもなく、誰かれ構わず暴力を振るうようになったのだ。

尋常な暴れ方ではない。

殴る叩く、それだけでは済まない。

手近な物はすべて凶器に変わり、止めようと近づく者には頭突きに掻きむしり、あげく嘔みついた。

恒彦の両手にも、既に幾つもの嘔み跡が深々と刻まれていた。

左の頬には爪で抉られた三条の筋がピンク色の傷跡として残っている。身を反らすのがあと少し遅ければ、左目をやられていただろう。

それでも週に三回は見舞いを欠かさなかった。

こんな状態だからこそ、他の者に娘を任せ切る事は彼には出来なかったのだ。

「今日は良い知らせがありますよ、清水さん」

院長室のソファに座った恒彦に、ピシリと糊の利いた白衣を纏った病院長が葉巻を勧めた。

「イヤ、私はけっこう。それよりも良い知らせとは何でしょう。『今日は機嫌もよく一度も暴れませんでした』などという話はいい加減聞き飽きましたぞ」

「いやいや、これは手厳しいですな」

悪びれた様子もなく、彼の向かいに腰を降ろした病院長はカッターで吸い口を挟みながら言った。

「笑いましたよ、お嬢さんが」

「わらった…加夏子が…それは本当か？」

「はい。そのように報告を受けております。お嬢さんの状態は当院の治療チームの尽力により着実に改善へと向かっておりますよ、御喜び下さい」

病院長が人を呼び、清水氏を病室までご案内なさいといつけた。

院長室を後にしながら、恒彦は走りだしてしまいそうな自分を抑えるのに必死だった。

加夏子

カナコ

やっとだ

これで紗季子も呼べる

「…清水さん、お話があります…」

先に立って歩いていた男が振り返り、恒彦の顔をじっと覗き込んだ。

銀さんだった。